

令和4年(ワ)第 1880号311子ども甲状腺がん裁判(損害賠償請求事件)
令和4年(ワ)第22539号311子ども甲状腺がん裁判(損害賠償請求事件)
原告 1ほか
被告 東京電力ホールディングス株式会社

意見陳述要旨

2023年3月15日

原告3

1、被ばく

今日は3月15日。

12年前のこの日、午後3時を過ぎたちょうど今頃の時間。
私の住む町に、高濃度の放射性プルームが襲ってきました。

当時、地元の地方テレビでは、放射能は花粉みたいなもので
払ってゴミ袋に入れて1週間おいておけばいいなどと放送していました。
そして、枝野官房長官が「直ちに健康に影響はありません」と
記者会見で話していたのを鮮明に覚えています。
国の人と言うならそうなのかなと思いましたが、
家族はそれを見て、そんなはずがないと言っていました。
まだ中3だった私には、何が正しいのかよく分かりませんでした。
家族の言っていることが間違っているとは思えませんでした。

しばらくして、県内の子どもにヨウ素剤が配られるという噂を耳にしました。
私も家族も、とても安堵しました。
いつかいつかと心待ちにしていたのですが、薬は結局、配られませんでした。
その後、福島医大のお医者さんとその家族のみに配られたということを知り、
市、県、国に対して初めて、大きな不信感を抱きました。

不安にかられながらも、あっという間に4月になり、
高校に入学しました。かわいい制服の憧れの高校です。
でも、楽しみにしていた高校生活は、原発事故の影響で、
想像していたものとは大分違いました。
中学時代、運動部に所属していた私は、
高校でも運動部に入ろうと楽しみにしていました。
バレーボール、チアリーダーなど、気になる部活は沢山あったけど、
母から「外で練習する部活はやめて欲しい」と言われていたので、
悩んだ挙句、帰宅部を選択しました。
今考えれば、どうせがんになるんだったら、好きなことをやればよかったと思います。

母は放射能をととても気にしていて、
「通学中は側溝の上は線量が高いから避けてね」とか、
「あそこは放射能が高いから行かないで」とか
「マスクをして」などと、いつも口にしていました。

事故前は、放課後に、よく友達と寄り道をして、
公園で遊んだり、食べ歩きをしていました。
高校でも、友達とそんなふうにごせると思っていたけれど、
いつも遊んでいた公園は草が身長より高く生えていて、人の姿はなく、
黄色のテープで封鎖されていました。
学校の校庭も土が掘り出されて、黒い袋に入れて山積みになれ、
放射線量を測る機械が置かれ、まるで工事現場のようでした。

「でも、放射能は危ないから仕方ない。」
きっとみんな同じ気持ちだろうと思っていたけど、
気にする友だちはほとんどいませんでした。
逆に、放射能の話をする、気にしすぎという態度を取られるので、

徐々に、放射能の話はしなくなりました。

2、華やかな将来を夢見た高校時代

私は、中学まで勉強嫌いでした。

ところが、高校に入って受けた初めてのテストでまさかの学年1位。やりたい部活もできないし、放課後に外で遊ぶこともできないので、勉強を頑張ってみようと思いました。

勉強が楽しく感じ始めた頃、

塾や学校の先生から、大学進学を勧められるようになりました。

「東京の大学に行きたい！」

もともと東京に出たいという憧れがあったので、

東京の有名な大学に入り、ドラマ「anego」の篠原涼子みたいに、バリバリ働くキャリアウーマンになりたいと夢見るようになりました。

成績は、ずっとオール5を維持することを目標にしていました。

ところが2年生になり、体育の成績だけ4になってしまいました。

2年の夏に再開されたプールの影響です。

水泳の授業が始まる前、体育の先生から、

授業に参加するかどうか、保護者の「同意書」が配られました。

そこには放射能に関しての記載があり、

「不参加」を選択しても、成績には影響しないと書いてありました。

その言葉を信じて、「不参加」に丸をつけ、体育を休みました。

しかし、その言葉は裏切られ、

結局、成績を下げられてしまいました。

放射能が原因による理不尽な結果に、やるせない気持ちになりました。

オール5は崩れてしまいましたが、

大学は、推薦入試で東京の大学を受けました。
合格発表があった12月半ば。
帰りのホームルームに、ドキドキしながら携帯で結果を見ました。
「合格した！」
その日は、とても晴れたポカポカとした陽気で、
受験で張り詰めていた気持ちがずっと軽くなったのを覚えています。

3、 崩れ始めた体調

3月に入ると、小さい頃から夢だった東京での1人暮らしが始まりました。
友達がたくさんできて、毎日、遊びと大学とバイトの日々。
充実した大学生活でした。

でも、1年生の終わり頃、生理が2週間周期で来るようになり、
体調に異変を感じました。
急激に体重が増え、これまでに経験したことのない肌荒れやむくみ。
朝になるとむくみの痛さで目を覚ますようになりました。
少し経つと今度は、唾を飲み込むときに異物感を感じるようになりました。

不安になり、母に相談すると、甲状腺異常の症状だから、
すぐに検査に行こうと言われました。3月、お墓参りで帰省した時、
福島県の甲状腺検査を受けました。

甲状腺検査の会場は、広々とした展示場でした。
会場内には、黄色い布で囲われたブースがいくつも設置され、
ブースごとに長蛇の列がありました。ブースに入ると、超音波の機械とベットがあり、
ベット脇に検査技師の女性が一人座っていました。
検査はすぐに終わるだろうと思っていましたが、

女性は首を傾げながら、何度も何度も、首に機械を当て、なかなか終わりませんでした。

検査の結果は2ヶ月ほどして実家に届きました。
結果を見た母から「B判定」の写真と報告の連絡がLINEに入っていました。
その時、私はまだ、それほど深刻なこととは思わず、
「わかった〜！」と二つ返事をしていました。

ところが数日後、県立医大から実家に、
早急に再検査に来るよう伝える電話が2回ほどありました。
これは深刻な状況なのかもしれない。
私は、甲状腺がんについて、必死にネットで調べました。
放射線によって発症した甲状腺がん患者の予後について
書かれた論文も読みました。
もしがんと診断されたら、手術する病院はどうするか。
大学はどうなるのか。

夜、自宅に帰ってベッドの中に入ると、
そんなことばかりが頭に浮かびました。

4、告知

2次検査は、福島県立医大と指定されていたので、
東京から福島まで行き、受診しました。
福島医大の扉をくぐると、古くて暗くてドヨンとした重い空気を感じました。

でも、2階の内分泌外科に到着すると、
先ほど感じた空気とはうって変わり、小さな子どもたちで溢れ、賑やかだった。

明るく元気な声が飛び交い、病院であることを忘れてしまいそうでした。

待合室で座っていると、お母さんと手を繋いだ
小学校1年生くらいの小さな女の子とすれ違いました。
明るく無邪気な子が多い中で、その子だけは俯いていました。
その不安げな表情は、なぜか今も脳裏に焼き付いています。

何度か検査に通い、穿刺吸引細胞診をすることになりました。
ベットに横たわり待っていると、先生が、針を持って病室に入ってきました。
「え、こんなに針が太いんですか？」母が驚いていました。
普段、あまり感情を出さない母が驚いている姿を見て少し怖くなり、
針を見ないように、壁を見ることにしました。

すると、注射のように針を刺すのではなく、
喉に直角に針を刺し、全体重を乗せてきました。
メリメリメリと筋肉を通過するような音が聞こえ、
痛いと思う前に、涙が出ていました。

乳頭がんと告知されたのは、それから1ヶ月後。
午後、診察の時間になっても先生はなかなか来ません。
看護師さんが焦った様子でやってきて、手術が長引いているので、
1階にあるスタバで待つよう言われました。
明るかった外は薄暗くなり病院にはもう人の姿はなく、
私たちだけになっていました。

先生が手術を終えたと連絡が入り、診察室で待っていると、
疲れた様子の先生がやってきました。
パソコン画面に紫色の気持ち悪い画像が映し出され、
何かなと思って見ていると、
「この紫になっているのがガン細胞です。」

甲状腺乳頭がんです。」とあっさりと告知を受けました。
母は驚いて、言葉が出ない様子でした。
反対に、私はとても冷静で、
「やっぱりそうだったんだ」と受け止めていました。

私の腫瘍はまだ小さく、
通常なら手術せず経過を観察する大きさだと説明されました。
でも、私のがんは気管に近く、早急に手術をしなければ、
全身に転移する可能性がある、先生は深刻な表情で説明しました。

それを頷いて聞いていたら、先生が急に
「気になっているかもしれませんが、
このがんは、福島原発事故との因果関係はありません。」
そう釘を刺しました。

母と私は、押し黙ったまま会計を終え、
病院を出て、駐車場まで沈黙が続きました。

「やっぱりがんだったね」
車に乗り込むと、重苦しい空気を破りたくて、そう一言、口にしました。
すると母は、「何がいけなかったんだろう」
「もうちょっと注意してればよかった」と言葉を繰り返していました。
「なったものは仕方ないから、早く東京の病院で手術しよう」
私は、そう返しました。

車を走らせて少しすると、母は突然、「運転できない」と言い出しました。
母は過呼吸気味で、力が入らないような様子でした。
少し先にサービスエリアがあったので、そこで休むことにしました。
車を止めて外に出ると、ふと音楽が聞こえてきました。
当時、流行っていた秦基博さんの「ひまわりの約束」でした。

「どうして君が泣くの、まだ僕も泣いていないのに」

そのフレーズに2人はハッと驚いて、お互いに見つめ合いました。
母の目は、赤く腫れていました。

「こんな歌詞だったんだ。」

2人でフッと笑い合い、「お腹すいたね」と顔を赤らめて、
お店のショーケースに売れ残っていた焼き鳥を2本買って、食べました。

5、手術

手術を受けたのはその半年後、大学3年の夏休み前です。
テスト後にすぐ教室を出て、急いで病院に向かいました。
この日は、すごく晴れていて、とても暑かった。
テストから解放され晴れ晴れとした気持ちと初めての入院に対する不安。
大学から駅に向かって橋を渡る光景をいまでも鮮明に覚えています。

入院したのは都内の大学病院です。
事故後から、福島県立医大にはずっと不信感があったので、
がんと告知を受けた後、東京の専門病院に転院。
さらに、内視鏡手術という傷が目立ちにくい術式があることを知り、
手術直前に、この大学病院に転院しました。

案内された病棟は古くて薄暗く、暗い雰囲気漂っていました。
がん患者だけの病棟だったせいか、若い患者は私だけ。
でも、実力のある有名な先生が主治医だったので、
手術さえ終われば、元の体に戻れるとワクワクした気持ちでした。

私は、母と雑貨屋さんで買ったお気に入りの

ふわふわのバスタオルをベッドに敷き、
ファッション誌を並べ、叔母さんにもらった3個のお守りも机に置いて、
ベッドを自分の秘密基地みたいにセットしました。
しばらくして、主治医が私のところにやってくると、目を少し見開いて驚き、
こんなふうに病室のベッドを自分の部屋のようにして、
楽しんでいる患者さんは初めてだと笑われました。

両親は、二人とも仕事を休み、入院から退院まで毎日、
私のアパートから病院に通い、病室で付き添ってくれました。
そのおかげもあり、不安や寂しさはありませんでした。
手術当日も、特に緊張はありませんでした。
私の前に入っていた手術も順調に終わり、
予定よりも早く手術の準備が始まりました。

オペ室の手前まで、母と病院を紹介してくれたSさんと一緒に行きました。
この日も天気が高く、これでがんがなくなるんだとウキウキした気分でした。
オペ室の手前で、まるでどこかに遊びに行くかのように
「行ってくるね～」と元気に手を振ったことを覚えています。

オペ室に入ると中は新しく、ドラマでみるオペ室よりもカラフルで綺麗でした。
10人ほどの看護師さんと青い手術着を着たドクターが
忙しく動き回っていましたが、
私の姿を見るとみんな気遣って、やさしく声をかけてくれました。

ベッドの上に横たわると、少しチクっとしますよと言われ、
左腕に麻酔を打たれました。
すると、今までに感じたことのないほど腕がジンジンと痛み痺れて、
ドクドクと熱い液体が体の中に入っていました。
まるで毒を入れられている感覚で、液体が肘まできたあたりで、
意識がなくなりました。

それから、どれくらい経ったのか。

「手術が終わりましたよ」と肩を叩かれました。
意識はあっても目は開かず、返事もできません。
ストレッチャーに乗せられ、病室に戻ると両親とSさんの3人が待っていました。

ベッドに到着した頃には、目は開けることができましたが、声は出ません。
すると急激に、気持ち悪さとひどい寒気が襲ってきました。
麻酔の副作用なのか。布団をかけられても、何をしても寒い。
熱は35度1分まで下がり、ガクガクと震えていました。

その様子を見ていたSさんは
「いつもの笑顔からは想像がつかない」と涙目になり、
「とても見ていることができない。」と肩を落として、病院を後にしました。
その言葉に、自分が変わり果てた姿であることを悟りました。
私は、お見舞いに来てくれたことのお礼を伝えなかったけれど、
伝えられませんでした。

6、元に戻らなかった

手術が終われば、がんがなくなり、元の自分に戻れる。
手術前は、そう期待していました。
でも、そううまくはいきませんでした。

手術後、体調を崩しやすくなり、月に一回以上、風邪をひくようになりました。
カフェでのハードなアルバイトは続けられず、事務のアルバイトに切り替え、
バイトの収入は半分以下になりました。

何をやるにしても健康を一番に考えて、

何事もセーブする癖がつきました。身体に悪い食品は避け、
友だちと夜中まで遊ぶことも、徹夜することもなくなりました。

就職活動も、体のことばかり考えて、やりたい仕事が変わらなくなりました。
病気になる前は、メディアの仕事に就きたいと思っていましたが
激務だから辞めた方がいいと言われ、諦めました。
昔は、やりたいことは何でも行動に移してきたのに、
そういう気持ちはいつの間にかなくなっていました。

就活の時、病歴を書かなければならない企業もありました。
がんのことを書いた途端、落とされることが続き、ほかすようになりました。
そのたびに、罪悪感でモヤモヤした。

結局、入社したのは、広告代理店です。
綺麗なオフィスでバリバリ働くという夢は実現しました。
でも、体調が不安で、嬉しいといった気持ちはそれほど湧きませんでした。

実際に入社後も、月に一度は風邪を引き、常に体調が悪い状態が続きました。
会社では、頻繁に飲み会がありました。
でも、体に悪いお酒を飲むことが苦痛でした。
ストレスも重なり、次第に風邪が治らなくなりました。
最後は、気管支炎から喘息、肺炎になり、
入社から1年半後。仕事をやめざるを得ませんでした。

コロナが流行し始めたのは、その半年後です。
熱が出ても病院に行けない不安な日々。
人を頼れず、初めて孤独を感じました。

本来なら、第二新卒として就職活動をすることのできる年齢でしたが、
咳と熱が頻繁に出ていたので、体調が復活するまで自宅で療養することにしました。

その間、友人は会社を辞め希望の職種に転職し、
キャリアアップして楽しそうに働いている。

私は今、体に負荷をかからない事務の仕事をしています。
やりたい仕事があっても、自信が持てない。
社会人6年目になるけれど、それに見合った能力がなく、
何も成長できていないと感じています。

7、裁判

私が裁判をしたいと思ったのは、今から7年前。
がんと診断された日です。

県立医大で、がんと告知された直後に言われた
「原発事故と因果関係はありません」という言葉に強い不信感を抱き、
このことが、私を裁判に駆り立てました。

「直ちに健康影響はない」という原発事故後の枝野元官房長官の言葉。
「アンダーコントロール」というオリンピック招致時の安倍元首相の言葉。
がんになる前から、国や県に対して強い不信感があったので、
決断に時間はかからなかった。

そして、もう一つ。
私の背中を押したのは、この病気が家族を苦しめているからです。
東京から福島まで大学を休み何度も検査をする過程で
奨学金をファイにしてしまったり、保険対象外の内視鏡手術など多額の出費をしたり、
家計にも大きな負担をかけてきました。

そして、精神的な負荷はそれ以上です。
このがんは、ただのがんではありません。
差別や中傷を受ける可能性もある。

一人っ子の私を大切に育ててくれた両親と家族は、常に私の将来を心配し、胸を痛めています。告知を受けた日の母の涙は忘れることができません。

でも、提訴をするにしても、当時はまだ大学生で未成年。アルバイト代は生活費に回すので精一杯。一人で裁判を起こすことは現実的ではありませんでした。「これは、公害事件として位置付けられるから、支援団体があるかもしれない。」ネットで何度も検索しました。でも、そんな団体は一つもありませんでした。「あー。日本の誰ひとり、このことに関心ないんだな」と絶望的な気持ちでした。

でも、様々な方が支えてくださり、去年提訴することができました。これまでずっと、1人戦うことになるだろうと思っていたので、他にも原告になる人がいると聞いた時は、驚きました。

提訴前、原告同士の繋がりほとんどありませんでした。どこか壁があって、お互いのことを話せませんでした。関係性が変わったのは、原告2番のあおいちゃんがトップバッターで意見陳述を頑張ってくれたこと。その時、初めてあおいちゃんの辛かった体験を知ることができ、それから、少しずつお互いに辛かったことや、治療のことを話せるようになり、この一年で、絆を深めることができたと感じています。

原告全員の意見陳述を認めてくださり、裁判官の皆さんにはとても感謝しています。

私たち原告の中には、再発や転移をしている子もいます。

生活が厳しい子もいます。でも、誰も手を差し伸べてくれません。
しまいには、EU への書簡で元首相が書いた「甲状腺がんで苦しんでいる」という一節を、岸田首相も、環境大臣も、そして内堀福島県知事までもが否定をしています。

裁判所には、政府の意向を考慮することなく、起きた事実だけを捉えて、しっかりと判断してほしいです。

わたしよりも幼い子どもたちが被ばくをして苦しんでいて、今後も健康被害が生まれ、苦しむ子どもたちが増えてくる可能性がある。弱い立場にある子どもたちを見捨てずに、未来のある子どもたちがしっかりと救済され、幸せな人生を生きられる世の中にしてほしい。そう願っています。